



文苑

新年梅

御製

たちかへる年の朝日に梅のはな

かをりうめたり雪間なからに

皇后宮御歌

大君の千代田の宮の梅のはな

るみほころひぬ年のはしめに

東宮御歌

あらたまの年の始の梅のはな

東宮妃御歌

見るわれさへにほゝるまれつゝ

あたらしき年のほきこといひかはす

袖にもかをる梅のはつ花

深夜

鶯

水

朽ちし軒端のきばに有明ありあけの

月の光つきひかりにすや〜と

寐ねる子このわきも寒さむさげに

マチの箱はこはる少女をとめあり

雪の朝

つねを

まどの戸としろくわけ初はつむる 冬ふゆのあしたの嬉うれしさよ

峯もふるともわかぬまで  
紅葉も枯れてをちこちの  
鳥もなかに何時のまや

雪の夕

雪のひかりの夕ばへに  
家路をいそぐをとめ子を  
いかで今宵のをそきやと  
つめたき雪に父をまつ

花のうたげ

たのしき春ははやしぬと  
たどりく〜てさくら山  
はるのうたげの花むしる  
こゝろの友と遊ばばや

ふりつもりたる里の山  
梢にひとつつばみなく  
けさめづらしき六の花

つるの毛衣はらひつゝ  
門へにまてる母もわり  
ながむる窓に降積る  
こゝろも優し幼な兄弟

かすめる空に鳥の聲  
笑へる花の下かげに  
こゝに彼處に面白く  
舞つうたひつ暮るまで

冬花

中鳥歌子

うそこみの八手の花も花敷に

寒樹

見らるゝ冬になりけるか那

紅葉のちるをしみし我宿の

かれ木のかげに不盡は見ゆけり

鶯告春

鶯におどろかされて敷ふれば

今日こそ春の立日なりけり

竹相園歌會

山

佐々木信綱

かや山のかやきり開き子の爲に

孫の爲めにと杉苗うゝる

佐々木雪子

やまかげにうつろひすみて既に六年

みやこの手振かはり果てけん

増山深雪子

白たへにふりつもりたる朝ぼらけなちのやまく雪に見わたす

松倉止子

さしのほる朝日のかげにがみ山ひかりかやくゆきの色かな